

|| 特別連載 ||

※現在、さくらサイエンスプログラムは新型コロナウイルスの感染防止のため、海外からの招へいプログラムは実施していません。

科学技術  
振興機構

『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第263回

### 島根大学の活動報告



酒井 哲弥  
(島根大学  
総合理工学部教授)

### 多様な自然災害・ 災害軽減手法を学ぶ 国際スクールを開催

2020年2月9日〜16日、島根大学松江キャンパスにおいてユネスコチャエ「島根大学自然災害軽減フィールドスクール」を開催した。このフィールドスクールへの参加者の一部を、さくらサイエンスプログラムならびに島根大の支援を受けて招へいした。さくらサイエンスプログラムにより招へいしたのはネパール・トリブバン大より10名、インドネ



参加者のグループ写真

プログラム	
1日目	日本到着、オリエンテーション
2日目	オープニングセレモニー スクール講師陣による講義、ウェルカムパーティー
3日目	フィールドスクール：石見銀山地区の見学 (石見銀山、近隣の活断層等の見学)
4日目	フィールドスクール：三瓶山周辺の見学 (三瓶火山の地形、噴出物、小豆原埋没林等の見学)
5日目	スクール講師陣による講義
6日目	スクール講師陣による講義 フィールドスクール：斐伊川の洪水対策施設の見学
7日目	スクール講師陣による講義、参加学生によるグループ発表会 閉会式・フェアウェルパーティー
8日目	松江市内見学、帰国のため移動
9日目	帰国

シア・ガジヤマダ大より3名、キルギス・C Asanaliyev キルギス州立地質鉱山天然資源開発大より3名の合計16名(引率教員4名)である。ここに、フランス、スロベニア、チェコからの参加者が加わった。スクールの実施がコロナウイルス感染症の拡大初期と重なったため、中国、インド、イタリアからの参加が直前にキャンセルとなり、スクールは少し規模を縮小しての開催となった。

### 島根の自然災害・ 防災減災対策を学ぶ 各国の状況を情報共有する

自然災害にかかる各国の置かれた状況は異なる。2日半に渡って行われた講義では、日本で発生する自然災害や防災・減災対策にかかると、海外からの講師陣により、各国の災害にかかると、自然災害、それに対する防災・減災についての先端的な内容が紹介された。このスクールで最も重視されたのが、2日半に渡って実施した野外見学(フィールドスクール)である。島根県は自然に囲まれた土地であり、災害につながるさまざまな自然現象



突如現れた雪だるまと三瓶山



石見銀山周辺での野外巡検



斐伊川放水路の管理棟の見学



グループ発表の準備風景

最後に、今回の交流に支援頂いた「さくらサイエンスプログラム」に感謝を申し上げますと共に、このイベントの実施を陰で支えて頂いた島根大関係者、見学を受け入れて頂いた施設の方々々に心より御礼を申し上げます。

交流は、島根大学の自然災害軽減にかかる活動をアピールすること、各国との情報交換・学生交流を行うだけでなく、海外の学生に島根大学の留学生プログラムに興味を持ってもらい、留学先として、参加大学から、翌年の留学生入試への応募があった。お互いの大学の交流の強化に今回のプログラムが繋がったと我々は考えている。今回の交流は、互いの大学の教員同士の交流の場ともなった。この人脈を活かして、学生の相互派遣・留学生の受け入れの活性化・共同研究につなげていきたいと考えている。

が発生する。土砂災害警戒区域の地点数は、島根県の知名度とは逆に、日本国内で第二位を誇る。ここは古くから「たたら製鉄」の行われた土地でもあり、鉄鉱物の採取に伴って生じた大量の土砂の影響が島根県東部を流れる斐伊川には残る。天井川化した川は大規模な施設が斐伊川では充実にある。近場には活火山でもある三瓶山がある。世界遺産に指定されている石見銀山のある山もかつての火山である。これらの地点への大学からのアクセスも良好である。洪水、土砂災害、火山関連災害、災害と人との関わりを学ぶ場として、島根県東部は国内でも最適の場所の一つであると我々は自負している。2日半のフィールドスクールは、2日目の午後雨に降られた以外は、天候にも恵まれた。出雲大社での参拝を皮切りに開始したフィールドスクールでは、石見銀山、三瓶山、島根県東部を流れる斐伊川水系の洪水対策関連施設を訪問した。スクールの終わりに、参加学生らがグループに分かれ、6日間で学んだ内容・その中で

印象に残ったこと、学んだ内容の今後の活用などについて発表を行った。

### スクールの成果と今後の展望

スクールの成果として特筆すべきことは、異なる国からの学生同士が、初めて(?) 自国以外に人脈を作ったことであろう。初日に開催されたウェルカムパーティでは3カ国の学生、日本人学生がそれぞれグループを作ってしまった、なかなか交流が進まなかった。しかし、野外において議論をするうちに、互いの距離も縮まっていった。参加した日本人学生はとくに尻込みしがちであった。時間がたつにつれて、海外からの学生とSNSのアドレスを交換しあうなど、積極性が増していった。最後のフェアウエルパーティでは、お互いの国の歌を披露し合うなど、大いに盛り上がった。参加者同士の別れの場となった羽田空港では、別れを惜しむと共に、将来の再会を誓い合っていた。

今回のさくらサイエンスプログラムによる